

「記憶の再編成と歴史の読み替え」を实践する研究プロジェクト

－「産炭地」を重化学工業的近代から解放する試み－

佐藤直樹（愛知みずほ大学人間科学部）

0. プロジェクト概要¹－現代史とデジタルアーカイブ

「歴史評価問題」や「認識問題」が顕在化するなかで、現代歴史研究において、現場からの思考というもののはますます重要性を増していると考えられる。そうした背景のもと、本プロジェクトは、産炭地帯をはじめとする重化学工業地帯に着目し、現代史、特に日本の近代社会を構成要素である「国民生活」の「国策」への収斂を実体化してきたプロセスの解体を指向する。この視線のなかで、人工都市である夕張市が、「つくられ」「きえゆく」過程に焦点があてられる。この過程への焦点化は、「記された出来事（資料など）」へのメディア実践的アプローチによる多様な読みの可能性の確保を行うことが前提となる。「記された出来事」の再活性化によって得られた本プロジェクトの知見は、例えば、「放送アーカイブ」を〈読む〉というメディアリテラシー教育に活かされることになるであろう。

本プロジェクトはそうした趣旨のもと、初年度のリサーチを行ってきた。本稿は、2008年10月に行われたフィールドワークの記録である。

1. フィールドワーク概要－産炭地という〈空洞〉と夕張からの出発

北海道空知にある、「幌内、三笠、大夕張、夕張」をフィールドとした。幌内には、炭鉱の跡地が、「幌内を歩こう会」の活動の成果として、設立された「幌内炭鉱遺産公園」がある。そこには、当時の発電所や炭鉱工場の一部、あるいは崩れかけた幌内神社が残っている。こうした残骸としての跡地は、調査当時開催さ

れていた、「写真展：軍艦島－炭鉱の人々の暮らし」（三笠市内の博物館・共催：NPO 法人軍艦島を世界遺産にする会、みかさ炭鉱の記憶再生塾/協力：NPO 法人炭鉱の記憶推進事業団、北海道産業考古学会、北海道炭鉱遺産ファンクラブ）でも状況が確認できた。長崎港沖合 19 km のところにある端島は、現在は無人となったが、かつては 5,000 人以上もの人口があった島であった。そこは、160m×480m という狭さに、工場や事務所のほかに、昭和館（映画館）、公民館、パチンコ屋が立ち並び、神社、公園などがひしめきあう独特の姿から「軍艦島」と呼ばれていたものであった。炭鉱が、1974 年に閉山すると、まもなく無人島になった。炭鉱という場がいかにかに人工的・集中的に作られたものであることを物語るものである。さらに、三笠市から、夕張へ向かう途中にある大夕張もまた残骸としての場所である。かつては 3 万人ほどの人口があったというが、現在は町や小学校の記念碑のほか、野原と化してしまっている。その後、夕張市へ到着。今後のアーカイブ化について調査、企画を行った。

そもそも本プロジェクトが企画されたのは、あるワークショップがきっかけであった。それが、市民メディアサミット 2007 におけるワークショップ「マスメディアでは報じられない夕張の実情を知りメディアのあり方やこれからの地域のあり方を考える」であった。そこでは、当時夕張住民であった、3 名から夕張の現状を訴える報告があった。

2007 年度で廃校になった夕張小学校の教員、ある知的障害者の入所施設「清水沢学園」の職員は、夕張石炭博物館の関係者らは、マスメディアでは伝わらない、現場の情報を語り、夕張のふつうの日常や地域としての課題、再建問題について討論がなされた。

これらの取り組みは、いまだ初発的なものにとどまるとはいえ、空洞化したように思える現場から新たな物語を構築しなすひとつのメディア実践と捉えうるも

¹本稿は、東海大学総合研究機構プロジェクト 2008 年度「〈日本の近・現代史における北海道〉をめぐる人文科学的研究」の一環で、北海道夕張市を中心に、放送アーカイブを用いた現代史教育に関する研究調査の動向報告であり、本稿の記録は、今年度の成果の一部である。

のである。

2. 〈空洞〉を埋める記憶－〈読み〉の可能性へ

本プロジェクトでは、この後さらに炭鉱博物館に残ったビデオ資料のアーカイブ化のため、再調査を行い、夕張ファンタスティック映画祭 2009「ゆうばりアーカイブ」を企画するに至っている。その企画は、「映像の中から読み取る時代の情報と、この映像が撮影された当時の地域と住民それぞれが抱いていた今と変わらぬ夢や希望の片鱗を、再生に向けて歩みだした今の夕張市民にメッセージとして伝えていく」という意欲的な試みがなされる予定である。この試みは、夕張に存在すると想定されている〈空洞〉を読み替えることで、そこにかすかに存在する記憶を取り出そうとするものである。

こうした試みに近似したものは、すでに、「幌内炭鉱遺産公園」にみる「価値表現」(吉岡 2005)に現れている。それは、「人数ではなく、地域内外の交流の密度と質を重視する考え方であり、地域内外の人が対話と実践を重ねながら新たな価値を探って行こうとするものでもある」(吉岡 2005)とされる。その筋道は、経済的な復興からの脱却を図り、記憶がつながる「場」の形成に基本的な立場がある。

3. 今後の方向性－「解釈の権限問題」という課題

夕張市の現状は、余談を許さないほど、厳しい。2007年に財政破綻をすると、外部への人口流出による人口の減少に加えて、高齢者の人口比率の極端な増加、夕張炭鉱博物館閉鎖など相次いで、困難な状況がある。まず押さえるべきはこのことであろう。

そしてその上で、こうした試みのもつ可能性が開花するのをじっくりと考察し、実践していくことが求められている。本稿が、見てきたのは、産炭地に残る「記憶」のかけらを、アーカイブという手法で、あるいはメディア実践という形で、再活性化するというものであった。より具体的には、幌内の「残骸」は残骸としてではなく、「記憶」と混じりあったとき、現在からの解釈を許容し、新たな価値を獲得する可能性を秘めている。このことは解釈のありように根ざすものであると考えられる。「マスメディア」「国家/日本政府」以外にも、解釈主体となりうる「住民」、「関係者(活動家、研究者)」の運動的な視線がそこには介在している。ここで留意すべきは、「解釈の権限問題」といった問題群であるという方向性を最後に示したい。それは、「産炭地の『記憶』は誰のものか？」という問いである。

必ずしも「住民」ではありえない。

「記憶」の所有が論争的になりうるのは、「国家/日本政府」と「石炭産業に積極的に関わろうとする人々」によってつくられた「重化学工業的近代」を背負った産炭地という記録に、抗おうとする場合である。その抗いは、住民の日常埋没的な意識、すなわち産炭地の幻想にとらわれている場合は発現せず、それらは、地域づくり運動にみられるようなきわめて意識的な活動によって、私たちの前に現れるものである。こうした視線を、拡大し、「解釈の権限問題から「記憶」を社会学し、産炭地を解放する/できるか？」ということが、ひとつの中心的課題となるであろう。学問的営為と実践の隣接地帯が、このエリアでひとつの賭け金となえるような、そうした課題群がある。こうした「記憶の再編成と歴史の読み替え」を可能にする地平に可能性をみいだすものである。

【引用・参考文献】(必要最低限のものにとどめた)
吉岡宏高 2005「空知地域での炭坑遺産を手がかりにした観光」『HEERO』48 北海道雇用経済研究機構